

御挨拶

中村歌右衛門

皆様  
本日はお暑い中をこ<sup>レ</sup>来場下されまして誠に有難うござい<sup>マ</sup>す。

「葉月会」は今年、第十五回の記念公演を開催いたす運びになりました。中堅、若手俳優の技芸発表の場であり、歌舞伎邦楽若手の勉強発表の場としても益々盛んになって参りましてこんな嬉しい事はございません。是もひとえに皆様方の温かいご支援のお陰様と厚く御礼申し上げます。

本年は、河竹黙阿弥原作の「高橋お傳」に依拠いたしまして葉月会台本とし、ご繁用中にもかかわりませず今回も河竹登志夫先生が監修について下さいました事は、多くの諸先輩の御指導と併せて出演者一同いかばかり励みになりますことか、一同に代わりまして厚く御礼を申し上げる次第でございます。

また舞踊は、記念公演の意をこめまして「雨やどり」をご覧いただきます。

本年も藤間勘十郎師には引き続ぎ振付をたまわり、暑中にもかかわりませぬお稽古をつけて下さ

一 同身にあまるご鞭撻でございまして、この場ではございますが心より厚く御礼を申し上げます。  
このように身にあまるご指導を頂戴して稽古を続けております修行中の者ばかりでございます。一同の稽古熱心に  
めんじて、どうぞ平に一度の舞台を見てやって下さいますよう重ねてお願い申し上げます。

なお、毎夏の開催にあたり惜しみなくお力添え下さいまするご指導の諸先輩をはじめ、関係者各位、特に国立劇場の皆様には心より御礼申し上げたく、この機会にご挨拶申しあげます。

平成八年八月

第十五回 葉月会 国立劇場大劇場

歌舞伎青年俳優  
歌舞伎邦楽若手 研修発表会

河竹 黙阿弥＝原作による葉月会台本  
河竹 登志夫＝監修

水傳

四幕六場

|           |          |
|-----------|----------|
| 序幕        | 草津宿下座敷の場 |
| 二幕目       | 吉田清五郎内の場 |
| 三幕目       | 品川浦御台場の場 |
| 四幕目       | 蔵前宿七藏殺の場 |
| 大詰        | 築地河岸捕縛の場 |
| (清元連中=出演) |          |

藤間勘十郎 振付

平成八年八月二十日(火) 十二時 開演

十二時開演

主催  
後援  
法人  
日本芸術文化振興会

# 葉月会第十五回記念

河竹黙阿弥 || 原作による葉月会台本  
河竹登志夫 || 監修

# 高橋お傳

演出 || 持田 謙

## 高橋お傳・その時代

明治九年八月二十六日の夜に蔵前で起きた殺人事件は世間を驚かした。若い女が、刃物で男の喉笛を切って殺したのだ。しかも、新東京の中心で起きただけに、時の政府は困惑した。司法は、日本最後の斬首刑で決着をつけた。見せしめと諸外国への決意表明であった。お傳の七歳殺しは、そういう世情の中で裁かれた。だがお傳は、なぜ七歳を殺したのか。その問い合わせ裁判で明らかにはならなかつたようだ。為に、評論家仮名垣魯文が「夜叉物語」を書き、下敷きで黙阿弥が芝居にし、團・菊・左が出演した。初演が、華々しく開場した西欧風の新富座だつた事も歴史に刻印している。

そして、実に一六年ぶりに、大劇場で封をきつたのが今回の「高橋お傳」である。

## 序幕 || 草津宿下座敷の場

|         |      |
|---------|------|
| 高橋お傳    | 歌    |
| 夫浪之助    | 紫若江  |
| 佐藤七歳    | 幸右衛門 |
| 妾お種梅之丞  |      |
| 女中ふじ長靖之 |      |
| 女中せん由   |      |
| 百姓八十八   | 吉    |
| 百姓麦藏    | 光    |
| 船頭弁藏    | 吉    |
| 浪之助父大助  | 權    |

〔お傳・その人〕 || お傳が生まれた下牧村は現在の群馬県沼田市である。お傳は昔流でいと上州人で、気が強い。

色白で肌の奇麗な娘で、十七歳で同じ村の浪之助へ嫁ぎ、平凡な農家の夫婦で一生を終える筈が——レブラと呼ばれた奇病に夫が冒された。村からも親類からも、うとまれて村を出た後、やがて草津で湯治を始めた。ここで同宿の佐藤七歳を知った。

古着屋七歳は早くからお傳に目をつけていた。横浜の外国人ヘボン医師に診て貰つた方がいい、という七歳の甘言を連れの妾のお種は七歳の腹を見すかしていつたが、奇しくもお傳が腹ちがいの妹とわかつて、お傳夫婦を横浜へ連れて帰る事になつた。

## 一幕目＝吉田清五郎内の場

あ  
つ  
た。

高橋お傳歌  
浪之助紫若江

促にきた金貸しとのやりとりを聞き、東京へどうしても金策に出掛けたいというお傳の願いをいれて船便を用意し、抱えの船頭弁蔵をつけてやった。

騒ぎのする夜であった。後ろ髪をひかれる思いで横浜から舟で品川沖を通って向かった。一方、お傳を見送る浪之助の許へ七歳の世話で医者から水薬が届いた。

んだ。たちまち容体が激変し、浪之助は悶え苦しみ始めた。びっくりした清五郎が浪之助を抱え起こした時

横浜で七藏の世話をなるうち、やはりお種の嫉妬をかい、お傳夫婦は吉田町の親分の清五郎の世話になつた。草津の宿で同じく知り合つた船頭弁藏の口ききで

この時お傳は品川沖を通つていた。

海の舟は上州生まれのお傳には辛い一時であった。

あつという間もなく、弁蔵の身体が宙に浮いた。あとはお傳はよく覚えていない。暗闇は水底だったのか。意識を失った。

えーた——どうして親分がここは? 清之助さんが、死んだよ』傳「——」

之助さんが、死んだよ』傳「――」  
ついさっき元気に見送ってくれた浪之助が、突然死ぬ筈がない——誰が?——そういえば、水薬が——もしや七藏が——お傳はしだいに正気を取り戻していつ

## 三幕目＝品川浦御台場の場

高橋お傳歌 江

船頭弁藏吉

吉田清五郎 吉三郎

## 四幕目＝蔵前宿七蔵殺の場

節だ。お傳はもちかけた——  
傳「好い音じめでありますねえ」……七「ぞつとする程仇っぽい」

高橋お傳歌江  
佐藤七蔵幸右衛門  
丸竹主人三次郎光  
同女房お竹歌紀  
同女中こう小松世  
同女中よね吉

明治九年の夏の終わり頃——。

蔵前片町の旅人宿丸竹の二階へ上がった男女があった。宿帳には夫婦と書いたが、とても、堅気には見えない。この二人つれが高橋お傳と佐藤七蔵であった。

二人は、みづくろって貰つた肴で仲良く飲み始めると折りよく軒合いから粹な清元の稽古が流れてきた。

『白雪の積もる戀にたくらべて……『明鳥』のひと

蚊帳の中で、待ちきれずに寝入つた七蔵の気配をたしかめて、お傳は用意の剃刀を握りしめた。寝静まつた宿。お傳は蚊帳の中へしのんだ——。

ハゼ釣りを楽しむ築地の河岸を急ぐ秀太郎を、息せき切つて追ってきたのはお傳だった。秀太郎には、お傳がひどく取り乱していたように見えた。

傳「秀さん、お願ひだから、急いで刃こぼれを研いでおくれな」

秀「そりや、姐さんのお頼みだから、間に合わせましょ  
うが、姐さん、着物の裾に血がついていますぜ」  
お傳は慌てていた。お傳は、丸竹宿を出たまま、凶器の剃刀の事で頭が一杯だった。そうだ血だ——早くどこかで洗い落さねばと、その時厳しい声が聞こえた。「お傳さんだね」「ハイ」お傳は思わず答えていた。五大区の分署の刑事であった。丸竹のお内儀もいて「あの人間に間違いございません」

## 同　II 築地河岸捕縛の場

高橋お傳歌江  
丸竹女房お竹歌紀  
釣り人小島松江  
同女中こう小松世  
探索川上健次  
探索遠藤辰夫  
研ぎ師秀太郎

# 大詰||裁判所本吟味の場

最後の裁判が開かれた。

高橋お傳 歌  
上官民尾論 吉三  
判事糺直道  
判事白辺白明  
浪之助父大助  
研ぎ師秀太郎  
丸竹主人三次郎  
官吏建三  
官吏丹作  
見聴人査  
傍聴人  
傍聴人  
傍聴人  
傍聴人  
富田菜川遠伊小川吉光辰権  
田中田崎藤島上  
信和尚健  
勲努昭治学雄清次六紀夫一義次郎江

審問は、出刃と剃刀に集中した。お傳の言う通り七  
歳が出刃で自害したとするならば、切口が合わない。  
喉笛が鋭い薄い刃物で切られていたからだ。そこでお  
傳が剃刀を持っていた事が重要な証拠になつた。お傳  
は言い張つた——証拠、証拠というけれど誰も現場  
を見てもいないので、どうして私が殺つたと言ひなさ  
るのか——と。だから証拠品と証人が重要なのだ  
——と検察は主張する。

丸竹宿の主人三次郎や、研ぎ師の秀太郎が証人とし  
て出廷した時、お傳は、はつとした。物音一つなかつ  
た夜の犯行現場を再現した三次郎の証言。言い合つて  
みたものの、剃刀の刃こぼれの研ぎを頼んだ事は曲げ  
られない。お傳は厳しい追求を受けると、「ア、イタ  
タタタッ」と胸を抑えてしゃがみこんだ。

黙秘権のなかつた時代。被告のせめてもの抵抗の手  
段をお傳も使つた。

時刻の大時計が鳴り、ついに判決がおりた。斬首刑  
であった。果然とするお傳。それは最後まで官憲にた  
てついた上州生まれの勝気が断ち切られた一瞬だった。

棚辱を、ふらふらと出たお傳の目は空を見据えていた。  
まさかの打ち首であった。裁判官席をにらみつけた。

二人の証人もたじろいだ。声もない傍聴席。その時、  
「これがあの嫁か」という大助の声がもれた。草津へ

迎えにきた舅の大助であった。お傳の胸中に何かが動  
いた瞬間、とてつもない大きなベルが鳴り響いた

く我に返った。お傳だけが何も終わっていなかった。  
お傳の思いを、かき消すように、舞台の幕が下りてい  
く——。

## 五大区||お傳を捕縛した探索が五大区の分署へこい、と 命令しています。

五大区は、廢藩置県の東京版で明治四年に施行  
され旧江戸町奉行の支配区を大区、他を小区と  
しました。ところが、伝統的な群町・村の生活  
区域と合わせず、十二年以降に廃止されました。  
僅かな期間の行政区画の名残が“ざんぎり物”  
に残りました。

藤間勘十郎||振付

# 雨やどり

常磐津連中

滝夜叉 中村歌江  
お富 尾上梅之丞  
滝川 朝顔  
賤の女 中村紫若  
定九郎 中村小次  
五郎 中村吉  
始皇帝 松本幸右衛門  
常磐津 和佐太夫  
常磐津 初勢太夫  
常磐津 和光太夫  
常磐津 和英太夫  
常磐津 岸澤巳之吉  
常磐津 文字蔵  
常磐津 斎  
淨瑠璃 上調子  
三味線

本名題は『二幅対名歌雨乞』（さんぶくついめいかのあまごい）雨にゆかりある 賤の女 朝顔 定九郎 滝川 お富 五郎 始皇帝 滝夜叉が登場し やがて一人づつ ゆかりの踊りを ご披露いたします。毎年 藤間勘十郎師の振付を頂いておりますが今年は十五周年でもある所から特に趣向あふれるこの舞踊をご指導いただきました。

○

さて 幕があくと 舞台一杯に浅葱幕 淨瑠璃のオキとなり、楽しみなひととき

ヘ灯籠のたわむれがきを そのままに 晴れ間を松の木のもとに集う由縁の雨やどり

ト ここで浅葱幕が落とされます

みると 松の根かたに 賤の女 朝顔 定九郎の三人が雨宿りをしています  
やがて 流麗な常磐津節につれられて 続々と登場してまいります  
どうぞごゆるりとお楽しみ下さいますよう ご案内申しあげます

# 登場した東京の海

## 消えた隅田川

その効果がうまく舞台化されている。ご覧頂きたい。

○……何といつても「高橋お傳」のハイライトは、初演の豪華な

配役である。

尾上菊五郎のお傳、市川團十郎の清五郎と裁判長 民尾諭の二役が白眉。

佐藤七藏に市川左團次、市川小團次の浪之助、市川團右衛門の野毛の介蔵。

岩井半四郎のお種、中村宗十郎の糺直道、坂東家 橋の山辺白明。

中村鶴藏の玉橋大助、など劇界挙げての感がある。

○……黙阿弥はぬかりなく明治初期の風俗景色を筋に織り込み、

当時の東京湾岸を横浜、品川、築地へかけて登場させてている。江戸といえば隅田川、水鳥は欠かせなかつたが登場せず、かわりに東京の海が描かれ、大規模な埋め立てが行われた横浜の古田新田や品川の夜景、御台場などが背景で活躍している。大きくな「改良」であった。

まくあい

資料館

○……「高橋お傳」は明治十二年五月、新富座に書き下ろされた。

默阿弥六十四歳の時である。お傳はその直前の一月三十一日に斬首刑で命を断たれた。処刑史上、最後の斬首刑であった。斬り手の太刀筋もあったのか、お傳が最後まで抵抗したのか、うまくいかず、それは凄惨を極めたという。海音寺潮五郎の「悪人列伝」の高橋お傳の巻に詳しく残されている。今の市ヶ谷にあつた監舎の裏手だという。

○……默阿弥は仮名垣魯文の「高橋於傳夜叉物語」によって劇化した。凝り性の菊五郎がお傳の平生を研究したり、小團次の扮した浪之助の写生が世評に上った。

話題は特に大詰の裁判所であつたらしい。默阿弥は勿論、役者・大道具方がうち揃つて東京裁判所の刑事法廷を実地見学し、その実況を模したのが大評判だった、とある。

葉月会もその先例を尊重したが、從来の裁判の場面があまりに写実すぎているのを改定し、客席から被告の表情がよく見えるように「斜めに」装置した。

# 樂屋特報　歌江・幸右衛門とともに幹部昇進へ

葉月会でお馴染みの歌江・幸右衛門さんがそろって幹部昇進をはたし、スタッフは申すに及ばず、ファンもこんな嬉しい事はございません。

歌江さんは、この四月歌舞伎座中村会公演で『初代中村歌江』を襲名して実現し、幸右衛門さんは現在の『松本幸右衛門』を引き続き名乗って実現しました。

葉月会十五周年の歴史の中で、今年を含めて、実に十一回の顔合わせをしている名コンビで、女形・立役の顔合わせといいながら勉強会の歴史でこれほど継続している歴史も珍しく、いかにお一人の人柄が尊敬と互譲の精神で共通に励まれているかを期せずして証明する事になりました。葉月会の誇りであります。

## 黙阿彌——お傳、雪に

### 持田諒（演出）

生には多様な人間鑑察の体験がありました。幼期は祖父の影響で芸者衆

に取り巻かれ、青年期に勘当されてからは「八笑人」（通人の理想郷）まがいの放縱な生活を過ごします。しかし、津藤に招かれての豪奢な遊びの中でさえ酒をたしなまず、自分を律し通した強靭な心の眼は、遊びのなかで常に人間を凝視していたのでしょう。

その眼が、「お傳」に向けられた時、人間の本性をそこに見出したと思えるのです。

『夢を追い、理想を掲げ、正義に血をかきたてる人間』というものの本質とは、動物であれ植物であれ、生きているものを食さなければ自らの生命を維持出来ない、生物全ての業の中から人間も又逃れられない生命であることをすれば、お傳が放った嘘も眞実と何が異なるのである。人間は汚濁の中に落下して消沈するものではなく、人間の行為、そのものの中にこそ眞実も光も秘められている」と。

黙阿彌は、明治七、八年頃より自分に吹いてくる西欧からの風に身をまかせながら、やがて大降りとなるであろう雪の予兆・風花（かざはな）を見たことでしょう。

「お傳の事件」が注目を浴びたのは、読み書きも出来た女性が残忍冷酷に男を殺した獣奇性にあつただけでなく、明らかに彼女の犯行と認められる中で否認を続けること二年。裁判中の態度も、簡単に前言をくつ返し、激情し、嘘を放言し、号泣するなどその豹変ぶりは今日言う多重人格者のようであったからです。

黙阿彌はこの希代の女性を直視しています。當時六十四歳。二十八歳で二世河竹新七を名乗って立作者となつて以来、山する程の人気狂言を書き続け、すでに身の引き際を考え、「葱塚」建立の準備にとりかかつた年でした。「古河黙阿彌」と改めたのは一年後のことです。

「寡默で義理人情に厚く徳深き人」と絶讚された黙阿彌ですが、前半

辛右衛門——長期巡業から帰ってきてすぐ葉月会の稽古へ——  
〔樂屋発〕

七月の始めに東京を出発して、八月の十一日に帰京する大巡業に参加していった幸右衛門さんは、慌ただしく稽古場入り。最近は若手の勉強芝居を指導する立場に立つなど、繁忙を極めている。今回は、佐藤七蔵の役。なかなか、くせのある人物で、お傳に惚れるや手に入れるまで蛇のように執念を燃やし続ける——從来にない役処だけに、戯前宿は見ものである。

黙阿彌物に、なくてはならない長唄の「附」を指導下すっているのが、菊劇団音楽部の第一人者政吉次さん。脇役の勉強会でも、本公演と変わりなく、附帳一を創作して下さるのには、同頭のトマガイの放縱な生活を過ごします。しかし、津藤に招かれての豪奢な遊びの中でさえ酒をたしなまず、自分を律し通した強靭な心の眼は、遊びのなかで常に人間を凝視していたのでしょう。

その眼が、「お傳」に向けられた時、人間の本性をそこに見出したと思えるのです。

「葉月会」は成島和男氏を中心に「埋れた古典狂言の復活」に取り組んできました。中村歌右衛門丈の直弟子として修行された中村歌江さんも幹部に昇格され、同じく幹部昇格の松本幸右衛門さんと共に更なる活躍が期待されます。公演の度に協力を惜しまれない政吉次師の附、沢山の出演者やベテランスタッフが一体となつて、炎暑の中を来場されるお客様に満身の舞台が披露できればと願っています。勉強の場を与えられた幸せを感じながら、一同稽古に励んでいます。

## 品川沖——今むかし——

東京湾。現代でこそマンハッタン島をめざして高層化されてきたが、同様な都市高層は明治維新が先輩である。大規模な埋め立てが行われて横浜に吉田新田が作られた。吉田の清五郎は実在のモデルがいたのかも知れない。

築地も新興地で魚河岸が日本橋から移転した話は有名。今は亡き久保田万太郎は『われらいたずらに去り行く夢を追うにあらず、われら祖先のうちたてる文化を、長く記念せんとするに外ならざるなり』。

“東京に江戸のまことのしぐれかな”と。お傳は東京へ急ぐあまり品川沖を通つて、海中に転落した。

## 船便——が活躍——

江戸前の発祥は奇麗な江戸湾あればこそ、盛時には鮮魚を便送する漁船が溢れ、消費都市・江戸をまかなつた重要な通商ルートであった。帆を使わず、艤だけで船を押し切つて進むのでもオショクリと呼ばれて活躍していた。弁蔵も紋次も、そうした船頭の一人だったのだろう。

黙阿弥物に、川は多いが、海は珍しく、葉月会でも海の波布が使われたのは今回がはじめて。荒い波がしらを表すには川の波布とは違う事も勉強々々。

## 江戸前——とは

弁蔵の船が横浜から海へ乗り出したころは荒れていても、いつか波頭の穏やかなやさしい内海になる辺りが、品川の沖である。江戸時代に栄えた品川の駅であり、その夜景の美しさは、「品川の夕河岸」と呼ばれて有名であったという。江戸の北は中川から、この品川の御台場あたり迄の水域を「江戸前」と言う説がある。定義は、諸説あって是は代表的な一つの説。上州から江戸へ出たばかりのお傳が、美しさに見ほれつい油断があつても頷ける美しさがあつたようだ。弁蔵もここで煙草をくゆらし、一服した。暗い海の向こうにゆらぐ紅灯の火を見ながら、弁蔵は何を思い出していたのだろう。広重の絵を見るようなひと場面である。

## 「御台場づつ」——とは——

二幕目の幕あき、清五郎の店先で呑んでいる人足たちが、割り勘のことを「御台場づつ」にしよう、と言つてゐる。当時、流行したのでしょうか、めいめいという感じが、飛びびの御台場の感じで實に面白い。因みに御台場とは、ペリー来航に備えて十一ヶ所作られた砲台の人工島。一度も使われなかつたのが幸いだつた。

# 葉月会

○……昭和五十八年の春、青年歌舞伎祭の企画を初めて持ち込んだ頃、歌舞伎座は松竹少女歌劇・SKDや、二波春夫を上演していた。国立劇場も研修発表会だけ。食堂も、稚魚の会や歌舞伎会、葉月会の人々が三々五々いただけ、今の賑わいは夢のようだ。

ニューオータニの広報から、外人向けにカブキを案内できるので随分と喜ばれたもこの時期で、当日売が外国人で賑わった。国立以外、東京ではカブキはやっていなかった。葉月会はこの時代に生まれた。大劇場で芝居をしたい——役者の悲願もすぐに国立劇場から許可が出た。なにもかも幸運だった。

当時脇役の会で活躍中の加賀屋歌江さんに会った。実は初対面ではない。昭和二十五年日米修交百年歌舞伎使節團でも、一緒だった。樂屋でもお会いしていたが、仕事で会ったのは初めてだった。第一印象は、ともかく芝居好き。今まで多くの役者に接してきた私もこれには驚いた。好きだけではない。実に詳しく述べて、すぐに意気投合した。

「どんどん大師」をやりたい、という。賛成である。時間もいいし、人数もいい。道具が一杯だし、何も問題がない。踊りは、坂東みの虫さんの「供奴」とみんなの「釣女」である。この企画会議の即決は、やがて続く十五年の中の新記録であろう。葉月会は快調にスタートした。

企画から制作の夢中時代

『どんどろ』から『敷島怪談』まで

女團七が登場 なんて懐かしい……こういう江戸前の芝居を見たかった〇：芝居は、いろいろある。黙阿弥だって、いろいろある。それは後五十年、繰り返し、繰り返し上演している物もある。それはそれで魅力があるからだ。しかし、むかし小芝居はなぜお客様を集めたのか。滅多に見られない芝居を板にのせたからではないか——誰からともなく、お客様がそう話していく。戦前には見られたのに、戦後も一回上演したきりやめてしまっている狂言があるのに——どうしてそれをやってくれないのか——例えば、二代目時蔵のあの神酒どくりといわれた人の得意とした狂言を——と、お客様は言い残して帰っていく。そうか、そういうえばある。あるぞ、必ずある——と懇願されて登場したのが、「女團七」でした。粹で、義理人情があつく、仁侠の世界——これがたいへん喜ばれ、受けました。葉月会の、ある方向が生まれてきました。

15 周 年

|    |   |     |
|----|---|-----|
| 1  | 吉野山・猿舞・越後獅子・船頭・神田祭・落人                             | 昭57 |
| 2  | どんどん大師 お弓  歌江 妙林・妙珍  左升・延寿 昭58・8・18               | 18  |
| 3  | 朝顔日記 深雪  歌江 徳右衛門  幸右衛門 昭59・8・18                   | 17  |
| 4  | 身壳の累 累・柳葉  歌江 與右衛門  幸右衛門 昭60・8・19                 | 19  |
| 5  | 四谷怪談 お岩・小平・お花  歌江 伊右衛門  幸右衛門 昭61・8・19             | 19  |
| 6  | 女團七 お辻  歌江 安  幸右衛門 源太左衛門  幸右衛門 昭62・8・19           | 19  |
| 7  | 志渡寺 お富  歌江 源四郎  幸右衛門 昭63・8・19                     | 19  |
| 8  | 切られお富 お富  歌江 源左衛門  駒助 平1・8・8 昭64・8・19             | 19  |
| 9  | 敷島物語 敷島・お玉・主鈴  歌江 與作  千次郎 平2・8・7 昭65・8・19         | 19  |
| 10 | 白浪五人女 お熊  歌江 賢三郎  幸右衛門 平3・8・7 昭66・8・19            | 19  |
| 11 | 傾城重の井 重の井  歌江 官太夫  幸右衛門 平4・8・7 昭67・8・19           | 19  |
| 12 | 戀闇鶴飼燎 小松・申作  歌江 德兵衛  権一 平5・8・7 昭68・8・19           | 19  |
| 13 | 姫妃のお百 お百  歌江 中川右膳  幸右衛門 平6・8・7 昭69・8・19           | 19  |
| 14 | 花卉お梅 お梅  歌江 巳之吉  幸右衛門 小澤たえ  左升 平7・8・7・16 昭70・8・19 | 19  |

上 演 一 覧 表

〔上演は大劇場・第一回小劇場〕

平成7年8月16日

写 真 集

# 月 梅 薫 脣 夜

## = 花 井 お 梅 =



待合水月女将お梅  
歌 江



丹次郎女房お園  
梅之丞 小澤たえ 左 升



(序 幕=芝居茶屋座敷の場)

金貸し九郎兵衛= 吉 次  
(左)芸者久吉= 歌 江

久吉は、裾をあらげて席をたつた。

逃がすまいとする九郎兵衛。その自信たっぷりな表情には、巳之吉へ貸した金の威力をかさにきていた。しかし、まだ久吉は真相を知らない。

まさか、自分の名前でこの九郎兵衛に借金があるとは——巳之吉が独断ではかった裁量が、この芝居茶屋ではしなくも、表面化した。久吉は、そういう巳之吉の差し出がましさが、いやでたまらなかつた。

別れてほしい——と願っていたのは、お梅の父親であり、嫉妬の巳之吉であり、師匠の小澤たえであった。

父傳之助は、そのために「水月」を開業してお梅を落ち着かせようとした。

しかし、丹次郎とのふか間は続く——ついに見かねた女房のお園は小澤たえの家を訪れた。

一中節の名うての師匠小澤たえ。お梅はここで門弟の丹次郎と出会い、恋に落ちた。

(二幕目=日吉町小澤内の場)

お園の言い分は、芸者のたて引きとは違つていた。  
お園が素人衆でなかつたら、お梅も簡単には引かなかつただろう。お梅はそういう女だ。

切々と思いを綴るお梅の姿には、不思議にも清々しさが漂つてゐる。人の道を歩きたい——お梅の筆運びにはある。

(同=芝居茶屋座敷の場)

# 月 梅 薫 脣 夜 = 花 井 = お 梅 =



(左) お 条 = 歌 江 お 梅 = 金 井



父 金 井 傳 之 助 = 幸 右 衛 門 お 条 = 歌 江



(左) 水 月 番 頭 巳 之 吉 = 幸 右 衛 門 お 条 = 歌 江



金 井 お 条 = 歌 江

丹次郎が帰ったあと、本心を吐露するお梅。——思い出すのは「女團七」のお梶だ——花道七三で、お主への義理から姑を殺し思わず叫んだ「おっ母さん」の一言には胸がえぐられた——ほとばしる独白であった。

やがて、酒を浴び、荒れた数日を過ごした——行く先もない。傳之助も巳之吉もお梅の帰りを待っているのに彷徨が続く。ひとりぼっちになつた——やさしい父親の顔が目に浮かんだ。

(三幕目) 池上温泉縁切の場

お梅はついに巳之吉を刺し、父親の待つ水月へ駆け込んだ。

○

お梅が歌江なら——巳之吉は幸右衛門だ。しかも——、父・傳之助も兼ねた。初の二タ役だ。

このコンビなくして『名場面』はない。

『朝顔一徳右衛門』『累一與右衛門』『お岩一伊右衛門』『お辻一源太左衛門』『お富一安』『敷島一源四郎』『お熊一神道徳次』『重の井一官太夫』『小松一賢三郎』『お百一右膳』そして——『お梅一巳之吉・傳之助』名コンビは実に十回に及んだ。

(四幕目) 同水月樓帳場の場

裁判所のお梅——縛り紐の編みに工夫が払われた。——小道具方の苦心である。

あでやかな芸者から、水月のお梅、そして服役囚へと転身していく歌江の表現力が問われた最後の場面であった。

結ばれた紐が黒の刑服に喰い込み、芸者久吉、水月の女将の半生が、十六年の刑に封印された。

(大詰) 裁判所表門前の場

実に議論百出の「企画・演出会議」でありました。

論点はお傳の悪女ぶりに集中したが、難病の亭主を抱えたお傳の献身的な看病と、後に佐藤七蔵を殺害するいたるお傳の一重人格をどう解釈するか——議論は伯仲しました。

悪女——この伝説に挑んだ今回の舞台づくりの骨格となつた討論の模様を誌上中継と題してお伝えします。

## 今、なぜ「お傳」を

——いま、なぜ「高橋お傳」なのか、という声がありますが。

悪女の筆頭といわれる程「高橋お傳」は有名なのに、その物語は以外に知られておりません。まずこの点が一つ。早速企画会議で検討してみると、初演の劇場、配役、劇界の意気込み等、取り組むに十分な歴史がありました。原作は二十一場もある大作でしたが制限内の六場に収めた為、場面集といった感があり、お傳の一代記というには大いに舌

語っているでしょう。

——その問題作にあえて挑戦した?

そんな大それた意図はありませんが、原作の置かれた環境を考えると、当時の社会に遠慮があつて、どこか無理を感じる所があり、一度見直しの再演に意義があると信じました。

——その辺をもう少し詳しく。

事件は明治九年の八月二十六日に起きました。お傳は間もなく逮捕されたのに判決が出たのは三年後の明治十二年の二月です。しかも、その年の六月に新富座で初演されていりますから、政府や司法に遠慮があつたろうという推測をしています。

——それが筋立てに無理が?

と、推測するのです。近年の『悪人列伝』の著者、海音寺潮五郎が「高橋お傳」を書いていて、當時西南戦争が勃発して、政府は大忙しだった。その政府にしては、司法は厳正だったのです。しかしそして上演する場合に、裁判批判など思いも及ばない時代ですし、そういった社会環境の中で書き下ろされた作品だっただけに事実審理への遠慮があつたと思われるような場面が時々見られます。一例が

足らずになりましたが。

——初演の劇場は。

西欧建築で有名な「新富座」でした。開場式に黙阿弥が一生に一度燕尾服を着たというあの劇場です。明治十二年、開場の翌年に初演された事は、演劇改良運動のメッカであつただけに資料価値以上のものが内蔵されているのが判りました。意気込みが凄いのです。

——配役に現れていますね。

そうですね、お傳を五代目菊五郎が勤めたのは黙阿弥の書き下ろしにはよくある事でしたが、九代目團十郎が清五郎と比尾論の二タ役に出演しているなどは、劇界あげての取組みを感じさせます。

総力戦ですか。

大袈裟にいえば、明治歌舞伎の将来がかかつて「新作」だったと言えるのですが。

——評判はもうひとつ?

そうでした。一一六年の歳月を経た今日までに、明治歌舞伎の評価は、転三転していますから、まだ何とも言えないと信じておりますが、初演の評判は芳しくなかつたようです。一度と陽の日を見なかつた歴史も半分以上はそれを物

## 浪之助の死は?

——浪之助は結局殺されたのですか、病死ですか。

黙阿弥の原作に忠実である限り、お傳が殺したという書き方はしてありません。七蔵が殺した事にもなっていません。事実はお傳が東京へ出かけた後、西洋の水薬を呑みすぎて悶死したとあります。この事実は、後に清五郎が証言をしています。

——犯人は七蔵ですか?

そういう劇ではないのです。七蔵がやつた、というのはお傳の思い込みであつて、七蔵が手を下した証拠などお傳が持っているわけはないのです。ただ、お傳は七蔵を下手人だと信じて仇討ちをした、という芝居が今回の「高橋お傳」なのです。

——お傳のイメージが違いますが。

高橋お傳といえば明治の悪女の最たるものですが、病気の亭主を殺し、お金ほしさに七蔵を殺したという伝説は実録

の一つです。例えば歌舞伎細見は亭主殺しを解説していますが演劇百科事典はそうは書いていません。裁判も七藏殺しを裁いたのであって、亭主殺しは起訴されていない。いつどこで亭主殺しになってしまったのか、悪女伝説も一度はフリイに掛けられるべきです。海音寺潮五郎の「悪人列伝」四巻に「高橋お傳」が書かれていますが、著者も悪女お傳の伝説に挑んだのだと思います。勿論、黙阿弥の原作とはまるで異なる実録物です。黙阿弥のお傳には、黙阿弥特有の悪に対する性善説がやはり根底に流れていると思います。

— よくわかりました。一つ伺いたいのは、どうしてお傳は船で東京へ？

どうして鉄道を使わなかつたか、という疑問でしょう。まだ開通したばかりの鉄道は間隔の時間が長くて、今のよう乗りたい時にうまく汽車があるとはいきませんでした。

その代わり横浜から築地へ行く船はよく使われたようです。黙阿弥の芝居で、海が出てくるのは珍しく、今度は品川沖も御台場も登場してきます。

— 清元の「明鳥」がうまい『きかせ淨瑠璃』で、情緒がありますね。

— 最後に、葉月会のこれからの方針というか、抱負をお聞かせ下さい。

お蔭さまで十五回を重ねる事ができたのは、本当にご頗頗のお蔭だと思います。特に、第九回の「敷島怪談」以来、発掘企画も評価されたのが仕事冥利につきるとスタッフ一同も喜んでいます。しかも、葉月会の中心として活躍してきた、歌江・幸右衛門のお一人が、そろって幹部待遇の昇進を果たした喜びは、ご本人達は勿論、周囲の裏方にとってこんな嬉しい果報はありませんでした。なんといっても表に立たない方々の支持なくしては成り立たない「仕事」です。現状の特徴は、歌江・幸右衛門に続きたいという若手が情熱を持ち始めた事、この意欲増進を果たした今回の幹部昇進の意義ははかり知れません。葉月会がこれに答えない筈もありません。従つて必然的にこれから葉月会の方針は、今以上に歌江・幸右衛門に頑張つていただきながら、第一、第二の歌江・幸右衛門が生まれてくるような環境を作る事、これに尽きると思います。企画もこれに従う発掘が続きます。

— どうも有難うございました。一層の発展を祈ります。

この芝居でただひとつ江戸世話物といった場面で、黙阿弥の「面日躍如」といった演出です。発端が草津だったり、濡れ場もなく、責め場もなく、殺し場も蚊帳の中、仕返しもない、といった伝統的な江戸芝居をやめて台詞劇をめざした萌芽がこの「高橋お傳」には残されています。

— 近代劇へのプロセスたらんとした？

今の私たちが想像する以上に大きな運動だったとおもいますよ。演劇を改良しようとする社会的な運動など、思つてみても羨ましい情熱ではありませんか。

— 裁判劇は初の登場でしょうか。

そうです。五代目も九代目もそろつて裁判所を見学したそうです。開廷の瞬間のドアの音や、硝子障子や、ガラスの絵などに五代目が凝った話が伝わっています。なんとか時代の変貌を観客に伝えて歌舞伎の変革をめざした意欲をただ痕跡として評価するだけでは、どうもいけないのでないか。風俗だけが変わっただけの「ざんぎり狂言」だと言われてきましたが、明治維新自体が「衣がえの国家」と今では評価されているのですから、黙阿弥だけが責められるいわれはない訳です。その時代がそうだったので、他の分野もそう威張れたものではなかった筈です。

## 樂屋特報

権　一一演劇賞受賞の喜びを葉月会へ

〔樂屋発〕

山崎権一さんが日本俳優協会演劇賞を受賞されて喜びいっぱい、葉月会に重ねてお祝いが続いた。なんといっても「姫妃のお白」で徳兵衛の代役を急きよ果した出演が忘れられない。今回は浪之助の父親大助の役。河原崎権十郎師匠についてひと筋五十年の年輪に陽が当たるのは是からである。

辰夫「粋な職人秀太郎で久しぶりの舞台

〔樂屋発〕

「傾城重の井」の立ち廻りや「戀闘鶴飼燎」に登場させた狼の群れなどで激賞されたかけの主役。立師としての勉強はこれから、となかなか表舞台へ立たなかつたが、今回は研ぎ師秀太郎で出演が決まった。

お傳と出会う築地河岸のやりとりから、裁判でお傳と火花を散らす証言の数々がみものである。

吉次・弁藏・糸直道　二タ役に燃える　〔樂屋発〕

なつかしい隅田川にかわって登場する黙阿弥の新風景・江戸湾を背景に歌江のお傳と船中の立ち廻りを演するのが弁藏の吉次さん。二人とも海へ転落するのにお傳が助かって、弁藏は行方不明！「ここをなんとか合理的に」と二夫に凝るところに吉次さんの面目が躍如としている。変わって裁判の立役者・糸直道（ただすなおみち）では、最後までお傳を問い合わせる「富樫ぶり」を見せるか、どうぞお楽しみに！吉右衛門門下の中堅です。

